

## ブレーメンの音楽隊

上手の袖幕には影絵のスクリーン。

下手の袖幕には大きな木が描かれている。

音楽。

上手よりロバがウクレレを弾きながら登場。

黒子が木と『ブレーメンはあつち』と書いた立て札をを持って、下手から上手へ動く。

ロバは中央で足踏み。

ロバ「♪僕はロバのロバ次郎 毎日荷物を運んでた でもギックリ腰になっちゃって 全てを捨ててきた  
ブレーメンへ行こう ブレーメンへ行こう 第二の人生スタートだ 音楽やって生きていく」

下手より、しゃがみこんでいる犬(警察犬)が登場。

犬「ハアツ……」

ロバ「おやっ、こんにちは犬くん。どうしたんだい？浮かない顔をして」

犬「僕はダメ犬さ。警察の仕事が嫌になって。今、ご主人様のところから逃げてきたばかりなんだ。

ハアツ……この先僕は、どうやって生きていけばいいんだろう」

ロバ「暗いなあ君は。僕の名前はロバ次郎。君、名前は何ていうの？」

犬「ケンケン」

ロバ「ケンケン。陽気な名前じゃないか。僕もついさつき、ご主人様のところから逃げ出したばかりなんだぜ」

犬「え、そうなの？」

ロバ「毎日毎日、重たい荷物担いでさ、朝から晩まで働いたよ。そしたら三日前、僕はギックリ腰になったんだ。その時、ご主人様はこう言ったんだよ。働かざる者食うべからず」

犬「ひよっとして、ご飯食べさせてもらえなかったの？」

ロバ「そーうーひどいだろ。だから、腰が治ったから逃げ出してきたんだ」

犬「そうか。じゃあ、ロバ次郎さんは、これからどこへ行くの？」

ロバ「ブレーメン」

犬「ブレーメン？」

ロバ「ブレーメンへ行つて、町の音楽隊に入ろうと思うんだ」

犬「音楽か…僕にもできるかな」

ロバ「できるさ。こんな所のため息ついてるくらいなら、一緒に音楽やろうぜ」

犬「うん、僕もブレーメンに行くよ」

音楽。

黒子が木と『ブレーメンはあつち』と書いた立て札を持って、下手から上手へ動く。

ロバと犬は中央で足踏み。

犬「僕は犬のケンケンです 警察犬をやっていた でもある日気づいた むなしさに 正義ってなん  
だろな ブレーメンへ行こう ブレーメンへ行こう 自分の正義を大切に 音楽やって生きていく」

下手より猫が泣きながら登場。

ロバ「おやっ、その猫さん。なんで泣いてるの？」

猫「だって泣かずにはいられないんだもの。おかみさんが、ネズミを捕まえられない私のことを役立

たずと言って、家から追い出したのよ。(泣く)私これからどうすればいいのー」

ロバ「だったら僕達と一緒にブレーメンへ行こうよ」

犬「音楽隊に入れてもらおうんだ」

猫「音楽隊か。私にもできるかしら」

ロバ「できるさ。こんな所で泣いてるくらいなら、一緒に音楽やろうぜ」

猫「やる。やったことないけどやるー」

ロバ「よしー！」

猫「私ネネ子。よろしく！」

音楽。

黒子が木と『ブレーメンはあっち』と書いた立て札を持って、下手から上手へ動く。

ロバと犬と猫は中央で足踏み。

猫「♪私は猫のネネ子です 昔は足が速かった でもだんだん足が遅くなって ネズミになめられる  
ブレーメンへ行こう ブレーメンへ行こう 新しい自分を探しに 音楽やって生きていく」

立ち止まるロバ。

ロバ「あ…。」

鶏が空を飛んできて、墜落する。

猫「落ちた」

犬「大変だ！」

猫「鳥さん大丈夫?!」

鶏が登場。

鶏「だ、大丈夫。ケガはしてなさそう」

ロバ「君、鶏だよね」

鶏「そっよ」

犬「鶏って空飛べるの？」

鶏「飛べない。でも必死で飛んだら飛べちゃった」

ロバ「すいね君」

鶏「こうしてがんばれるのも、今日が最後だからさ」

猫「最後って?」

鶏「明日、家でお祝いがあつてね。おかみさんは子供達にこう言ったわ。メインディッシュはフライドチ

キンねって」

犬「もしかしてそのフライドチキンって」

鶏「そう、この私よ。だから最後に、空を飛んでみたかったの。私の夢が叶ったわ(泣く)」

ロバ「そういうことなら鶏さん、僕達と一緒に行こう」

鶏「え?」

犬「僕達、ブレメンへ行くところなんだ」

ロバ「君も一緒に、音楽をやらなにか?」

猫「ここにいるよりは、絶対楽しい」ことが待ってるはずよ」

鶏「…やる。私音楽をやる！私もブレーメンに行く！」

ロバ「よし決まりだ！」

鶏「私は、」

猫「よろしくね、」

音楽。

鶏「♪私は鶏、」  
んだわ ブレーメンへ行こう ブレーメンへ行こう 今から生まれ変わって 音楽やって生きていく

四人は下手へ退場。

森のS.E.

下手より、蹴込みの中に猫と鶏が、木の前にロバと犬が登場。



口バ「ハアツ、ハアツ、疲れた…」

犬「喉も乾いたし…」

猫「私もう歩けない…」

鶏「私も、もう飛べない」

犬「もともと飛べないでしょ」

鶏「口バ次郎さん、ブレーメンまだなの？」

口バ「まだつかないみたいだ。ふあーっ、腹へった」

犬「僕も」

猫「私も」

鶏「私も」

犬「…ん？…クンクン…クンクン…」

鶏「どしたの？」

犬「いい匂いがする」

鶏「え？」

犬「あっちの方から臭う」

鶏「私が見てあげる。よいしょと」

木の上に乗るピヨ子。

上手スクリーンに、泥棒の家の影絵が浮かび上がる。

鶏「ん？…ん？…ん？…ん？」

犬「ピヨちゃん、何か見える？」

鶏「見えない。私、鳥目なんだよね」

犬「えー」

猫「もつ、しよつがないわね。私が見てあげる。よいしよつ  
犬「どつ?」

猫「なんか明かりのついた家が見える。人影も見えるわよ」

泥棒達の笑い声。

スクリーンに泥棒の影が動き出す。

ロバ達は下手に退場。

親方「今日の収穫は大物だな」

ナス「うまくいきましたね親方」

鰻頭「さつそく盗んだものを見ましようよ」

親方「そうだな。まずはこれだ」

親方がレオナルドダビンチの絵画を出す。

ナス・饅頭「おー」

親方「これはな、モナリザっていうんだぜ。どうだ、すげーだろ」

饅頭「すげーっス」

親方「おいナス、次はおめーの盗んだ物を見せろ」

ナス「へい、あつしが盗んだのはこれでやす」

ナスがピカソの絵画を出す。

饅頭「なんすか、このおかしな絵は」

ナス「オレにもわかんないんだけど、とにかく高いんだぞ」

饅頭「へー」

親方「じゃあ次はマンジユ。おめーの盗んだ物を見せろ」  
饅頭「へい、これです」

チーバ君の絵画を出す。

ロバ達がこっそり舞台下手から登場。

ナス「おいおい、チーバ君、じゃねえか」

饅頭「へい。可愛いでしょ」

ナス「可愛いけれども」

親方「まあいい。今日の収穫に祝杯をあげよう。乾杯！」

ナス・饅頭「乾杯！」

泥棒の家の外観の影絵。

その影絵を、ロバ、犬、猫、鶏の順で覗き込んでいる。

ロバ「わあーっ」

猫「なにになに?」

鶏「何が見えるの?」

ロバ「おいしそうな食べ物がたくさん見えるよ。それからおじさん達が笑ってる」

犬「おじさん達?」

ロバ「悪そうな顔をしている」

猫「悪そうな顔?」

鶏「じゃあ悪者よき」と

犬「人を見たためで判断しちやいけないう。どれどれ、僕にも見せて」

ロバ「ああ、どうぞ」

犬「あーあれは指名手配中の泥棒だよー!」

鶏「泥棒？どれどれ、見たい！」

犬「ああ、はいはい」

鶏「わあ、悪そうな顔」

猫「私も見たい」

鶏「見て見て」

猫「確かに泥棒顔ね」

鶏「でしょ」

口バ「あー、美味しそうな料理」

犬「美味しそうな匂い」

猫「食べたい」

鶏「だったらあの泥棒追っ払おう」

三人「え？」

鶏「で、あの」馳走を横取りしましょ」

犬「そんな悪い事できないよ」

鶏「でもあの泥棒達は悪者なんですよ」

猫「悪者に悪い事をするのは、良い事なんじゃない?」

犬「そうなの?」

ロバ「そういう」とにしよう」

鶏「私、いいこと思いついた」

猫「なに?」

鶏「私達が化け物のふりして、あいつらを驚かせるのよ」

猫「どうやって化け物のふりをするの?」

鶏「ケンケン、ロバ次郎さんの上に乗って」

犬「え、うん」

ロバ「ちよつと待つて、僕ぎっくり腰が治ったばかりなんだけど」

鶏「大丈夫。そーつと乗れば」



犬「じゃあ、そーつと乗るよ」

ロバ「そーつとだよ」

犬「そーつと、そーつと…よいしょ」

ロバ「はうっー！」

鶏「で、ケンケンの上にネネちゃん乗って」

猫「わかった。ひよいつ」

ロバ「ふーんー！」

鶏「で、私が一番上に乗るの。ほいつ」

ロバ「あーっー！」

鶏「それではお月様！私達を照らして！」

四人は蹴込みの中に消え、スクリーンに大きな化け物の影絵が現れる。

鶏「一斉に大きな声で鳴いて、窓を突き破って驚かすわよ」

猫「わかった」

犬「了解」

ロバ「腰が……」

鶏「3・2・1!!」

不気味な鳴き声が響く。

スクリーンが暗転。

窓の割れる音。

泥棒達の悲鳴。

上手から泥棒達が人形になって飛び出し、下手に走る。

親方「うわあああああー！」

ナス「化け物が出たああああー！」

饅頭「待つて待つて、置いてかないでー！」

親方が立ち止まり、ナスと饅頭も立ち止まる。

親方「おい、ちよつと俺達、慌て過ぎじゃないか？」

ナス「そうすね」

饅頭「親方が一番慌ててましたけど」

親方「うるせー。おいナス。おめー、ちよつと家戻つて様子を見てい」

ナス「ええつ？…あつしが？勘弁してくださいよ」

親方「じゃあマンジユ、おめーが行け」

饅頭「いやいやおいらはダメつすよ」

親方「いいから行けー！」

饅頭「えーっ、自分で行けばいいのに」

上手に向かって足踏みする饅頭。

親方とナスは下手に退場。

饅頭「なんでおいらが行かなきゃなんねーんだよ。ナスだっているのにさ。だいたい親方はいつもえらそうなんだよ。ったく……」

暗闇にひそひそ声が響く。

猫「あ、泥棒が戻って来たわ」

鶏「何人？」

猫「一人」

ロバ「よし、さつき考えた作戦でいい」

猫「じゃあ私は台所に隠れるわね」

犬「じゃあ僕は裏口の扉の影に」

鶏「私は屋根の上に」

ロバ「僕は庭のわらの中に隠れるよ」

饅頭は上手に退場。

扉の開く音。

饅頭「こんばんは……あれ？真つ暗だ……誰もいないんですかー？……いないのかな？……ちよつと

電気つけよう。電気の紐は、えーと……あ、あつたあつた、これだ」

スクリーンが真つ赤になり、饅頭と化け猫の影が浮かび上がる。

猫「ニヤーツー！」

鰻頭「わわわっ！」

猫「よくも私の尻尾を引っ張ったわね」

鰻頭「化け猫だ！」

猫「ネネちゃん怒ったわよ」

鰻頭「助けてくれーっ！」

猫「必殺、猫パンチ！」

鰻頭「痛てっ！」

猫「ニヤーツー！」

化け猫が消え、噛みつき犬の影が登場。

犬「ガブツ！」

饅頭「わあっ！」

犬「ガブガブッ」

饅頭「噛まれた」

犬「ガブッ」

饅頭「痛て」

犬「ガブッ」

饅頭「痛てっ」

噛みつき犬が消え、ロバの大きな足の影。

饅頭「うわっ！」

ロバ「今度はロバキック！」

饅頭「わあっ！」にも化け物がいた！逃げるーっ」

鶏「コケコッコー!」

饅頭「ヒエキキエエツ! おつ、親つ、親方ーっ」

影絵暗転。

饅頭は人形になって上手より走り出す。

下手より親方とナスが登場して、饅頭とぶつかる。

親方「痛てっ」

ナス「痛てーよマンジユ」

饅頭「おおお親方っ」

親方「おう、どうだった?」

饅頭「どうもこうもねーでさーあの家にやあ、おつそろしい化け物達がいます」

ナス「ばっ?」



親方「化け物?!」

鰻頭「台所には長い爪を持った化け猫がいます。その化け猫は、おいらの顔を、長い爪で引つ掻きやした」

ナス「ひいつ」

鰻頭「裏口の扉のそばには噛みつき犬がいて、おいらの足をガブリと噛みやがった」

ナス「あわわわ」

鰻頭「庭のわらの中には大きな怪物馬が隠れてて、おいらを蹴飛ばして」

ナス「ひよおおおお」

鰻頭「屋根の上から化け鳥が、雄叫びをあげたんでさあ。この泥棒やろうつて!」

ナス「きつと泥棒なんかしたから、バチが当たったんだよあつし達」

鰻頭「親方、おいらはもう、泥棒なんかやめませす!」

ナス「あつしもやめませす!」

親方「おいおい、何言つてんだよお前達」

ナス「明日から真面目に働くぞ！」

鰻頭「おいらも真面目になる！」

ナス・鰻頭「さよなら親方！」

ナスと鰻頭、下手に退場。

親方「おいおい、お前達！俺を置いてくなよ、待ってー！」

親方下手に退場。

黒子が部屋の背景を吊るす。

ロバ達が蹴込みから顔を出す。

ロバ「アハハハ、泥棒達を二度も驚かしてやったぞ」

犬「もう来ないかな」

猫「また来たたら、もう一回驚かしてやりましょ」

鶏「ハアーツ、お腹もいっぱいになったし、満足満足」

ロバがウクレレを弾く。

鶏「♪生きていればいろいろある」

猫「♪誰でもみんな 年を取る」

犬「♪今一緒に過ごすこの奇跡を」

ロバ「♪大事に 楽しもう」

四人「♪ブレイメンに行こう ブレイメンに行こう」

ロバ「…それにしても…なかなか良い家だね、ここ」

猫「うん、私もそう思ってたことよ」

鶏「この場所でもできるんじゃない？ 私達の音楽」

犬「つてことは、ここが僕らのブレイメン？」

ウクレレが盛り上がって、

四人「♪ブレイメンに行こうと 思ったけれど ここが僕らのブレイメン 僕らは四人で音楽隊 ブレイメンの音楽隊」

おわり